

日本語と日本文化との接点

—日本語教育の立場から—

陳 俊 森*

I 日本語教育における文化の問題

言語の学習はいつも文化が伴っている。言語と文化は切っても切れない関係にあるからである。言語の学習は最初から単語や文型から始めてだんだん自然な会話や生の文章が現れ、そのなかには人々の感情や価値観なども含まれて学習者はそれに触れているうちにその言語を操る人々の思考様式や行動様式、生活様式も分かってくるわけである。

日本語教育の目的の一つは、異文化を持つ日本人とコミュニケーションをはかるということである。スムーズに日本語で日本人とコミュニケーションを行うためには、音声、語彙、文法、文章などの言語知識だけでなく、日本文化、日本社会などの知識も必要である。そのなかでとくに、日本人の言語行動の特徴、さらに日本人の言語観というものを理解することは重要である。

しかし、これまでの日本語教育は文化問題を重要視してきたが、教育課程に必要なシラバスとして構造シラバス、機能シラバス、話題シラバス、技能シラバスなどがよく取り上げられ、文化シラバスはあまり取り上げられていない。つまり、日本語教育課程の中には、どんな文化項目を組み入れたらいいかという議論は少なかったのである。シラバスがなくても日本語教育の中では文化の問題がないとはいえないが、意識的に文化の項目を組み入れなくても、言葉と文化の密接な関係があるから、自然に現れてくる

わけである。これは避けようとしてもなかなか避けられないものだ。しかし、自然に出るから、シラバスなどを規定しなくてもいいといたら、そうでもない。自然にでてくる文化現象や文化項目は日本語教育に適当かどうか、系統的なものであるかどうか、偏りがいいかどうか、伝統と現代のバランスがとれているかどうか、などはよく問題になる。したがって、構造シラバスや機能シラバスなどと同じように文化シラバスもよく考えて系統的に、しかも対象別や目的別に文化項目を日本語教育の中に取り入れたらどうかとわたしは考えている。数年前に「社会文化背景知識」、「言語行動の特徴」、「非言語行動の特徴」、「価値観」という4項目からなる文化シラバスの試案を提出してみたことがある。

II 日本語教育における文化シラバスについての提案

(1) 社会文化背景知識—例えば、衣食住、自然と余暇、行事、日常生活、マス・メディア、交通、教育、政治制度、経済、科学技術、文学と芸術、宗教信仰、中日交流史など。

(2) 言語行動の特徴—例えば、日本人の言語観、定型化したあいさつ、人称と呼称、あいづち、女ことばと男ことば、敬語意識、自動詞と他動詞、授受、迷惑の受身、省略表現、非断定表現、婉曲表現、断り表現、原因と理由、感情形容詞、日本人の愛用語句、ことばの文化的連想、ことわざと慣用語など。

(3) 非言語行動の特徴—例えば、身体動作、

*平成一九年度東洋大学交換研究員，華中科技大学外国語学院・教授

空間の使い方、接触行動、準言語、身体特徴と人工品、時間の使い方など。

(4) 価値観—例えば、不言実行、腹芸、以心伝心、集団主義、運命共同体、縁、恩、恥、思いやり、義理、人情、うちとそと、甘え、間柄、根回し、建前と本音、世間体、察し、勤労意識など。

文化は目に見えるものと見えないものに分けられるが、価値観は目に見えないものである。しかし、目に見えないものはときどき言語行動により見えてくることがある。

同じ場面の応対だが、日本語、英語と中国語はそれぞれ表現の様式が違うことがある。たとえば、お客さんに対する店員の応対の言葉：

日本：いらっしゃいませ。

アメリカ：Can I help you?

中国：你要买什么？

日本の場合には顧客をお客様として扱っている。アメリカの場合には顧客を助ける対象としている。これに対して中国の場合には顧客をただの買い手として扱っている。近年来、中国では一部の大きなデパートや高価なものを売っている店の店員は「欢迎光临！」という傾向が現れてきたが、その言葉のすぐ後で「你要买什么？（何を買いたいですか）」という性急な表現が出てくる。露天市場で野菜などを買う場合は「欢迎光临」という表現はあまり聞こえない。

もうひとつの例である。

隣の庭には果樹があり、其の上に果実が実っているという場面が設定される。この家のこどもに聞く。「隣の庭の果物がおいしそうですね、どうして採ってきて食べないですか。」

子供の答えは文化により異なるかもしれない。

中国の場合：他人のものですから無断で採ってはいけません。

アメリカ（キリスト教の家庭）：神様に見られているので無断で採ってはいけません。

中国では、「不義而富且貴、於我如浮雲」（不義にして富み且つ貴きは、我において浮雲のご

とし）、「君子愛財取之有道」（君子は財を愛するもこれをとるに道あり）という古くからの道徳の伝承がある。

アメリカの場合はキリスト教の影響で人間が神様の子だから、神様によって守られており、また、神様によって監視されているのである。このようにわれわれの言語行動は目に見えない文化によりコントロールされているわけである。同じ表現がないわけではないが、あれを選ばずこれを選ぶ。という理由は文化あるいは価値観の力によるところが大きい。

言語と文化との接点を考えるに際し、次のいくつかの言語行動についてその特徴を見ていきたいと思う。

1. 定型化したあいさつ

朝大学に来たとき玄関で警備員さんに「おはようございます」、例えば、東洋大学の2号館受付で研究室の鍵を借りたら受付の人に「よろしくお願ひします。」また、夕方、鍵を預けたら「お疲れ様でした。」と挨拶をされる。あまり知らない職員と廊下で会ったら「今日は」と挨拶を交わす。このように交換研究員としてのわたしは毎日のように挨拶と接している。

日本の挨拶は種類が実に多い。

人に会ったりするとき、歓迎、別れ、初対面、感謝と応答、お詫びと応答、帰ってきたとき、出掛けるとき、食事のとき、相手の勤勉を評価するとき、贈り物をするとき、応諾の言葉など、たくさん決まりきった表現がある。

挨拶のことは人と人の関係を密接にする働きを持ち、人間関係の潤滑油の役を果たしている。日本語の挨拶は定型化され、言葉の表面的な意味とかけ離れて決まり文句として用いられる。それにしても儀礼的に、コミュニケーションを行ううえで必要不可欠な言葉の運用なのだ。

挨拶の言葉は日本語教育では、次の問題点がある。

まず、こんなに種類の多い挨拶の表現は一斉に導入することが不可能なことだが、何を選んだらいいか、どのように順序付けて導入したら

いいか、どのように導入したらいいか、ということも考えておくべきことである。

第2に挨拶の言葉の使い方であるが、つまり、使う場面などを明らかにして、自然な挨拶語の導入が必要だと思う。

中国の初級日本語ではよく「おはよう（ございます）」、「こんにちは」、「こんばんは」、「さようなら」、「すみません」などを教えるが、これらのあいさつを使う場面についての説明も訓練も少ない。つまり、挨拶語の語用分析も少ないし、使い分けの解析も足りない。

たとえば、「すみません」は詫げる表現として一般に知られているが、しかし、中国の日本語学習者は「すみません」の感謝の使い方はほとんど使えない。教師からの説明の不足が原因のひとつだが、教材の中にはこのような使い方がほとんど現れていないのが主な原因ではないだろうか。もちろん中国語の対応表現「对不起」からの言語干渉の原因もあると思う。さらに「すみません」のなかに含まれている日本人の深層にある遠慮意識に対する理解はまだまだ足りないからでもある。

第3は学習者にとって習得しにくい挨拶の言葉の説明や練習をよくしなければならぬことである。たとえば次のようなものがあると思う。

失礼します、この間はどうも（先日は失礼しました）、すみません、別れの挨拶などである。

「日本語教育は挨拶から始まる」というのは、ことばの原点を重視する考え方につながっている。

2. 日本語の人称

世界のすべての言語には必ず全人類共通のものが含まれていると同時に、自分自身の文化に制約されるものがある。言い換えれば、言葉の中にはほかの文化の人でも理解できるものもあれば、自分自身の文化しか説明できないものもある。

夏目漱石の「我輩は猫である」の英訳は I am a cat だが、逆に日本語に訳せば、

吾（われ）は猫なり。

俺は猫だ。

我（われ）は猫よ。

I —— 我が輩、吾、俺、私…

と指摘されたことがある。つまり、英語の I は日本語の「我が輩」「吾」「我」「俺」などの第一人称代名詞に対応している。そうすれば、日本語の人称代名詞に含まれている「尊敬と謙譲」、「年齢」、「性差」、「傲慢不遜」の語感などはすべてなくなってしまふ。

この小説の中国語訳も同じぐらいの問題が存在している。小説の中の「我が輩」は謙虚の気持ちも含まれているが、一人前の存在、あるいは人間の前で尊大な気持ちを持っている意味合いがある。しかし、中国語に翻訳されたら、そのようなニュアンスがなかなか味わえない。

つぎはある日本語教材の中の例文とその翻訳である。

お前が家のためにどれだけつくしてくれているかおれには十分わかっているよ。／我十分清楚，你为家里已经尽了多么大的努力。

日本語では、夫婦関係であることがはっきりしているが、訳文ではよくわからない。

人称代名詞も語用の問題があるから、最初から学習者に知ってもらわないと正しい理解と運用は問題となることがしばしばある。

わたくし、わたし、あたし、ぼく、おれ
あなた、あんた、きみ、お前、貴様

これらの常用人称代名詞は「男性語」、「女性語」、「フォーマル」、「インフォーマル」、「目上の人に対して」、「対等関係」、「目下の人に対して」、「仲がいい」、「荒っぽい」、「妻に対して」、「夫に対して」などの語用分析項目を設けて分析することができるが、実際の運用はずっと複雑なものである。

翻訳しにくい例文：

「ある雑誌を眺めていたら、近頃の中学生、高校生の女の子は自分のことを「僕」と呼ぶという記事が載っていた。実は、私も自分のことを「僕」と呼ぶ一人だ。もう高校生でもないのにちょっと恥ずかしい。目上の人の前では注意深く、「私」または「あたし」を使っているが、自分の言葉に熱中してしまうとつい「僕」と言ってしまい顔が赤くなる。」

一見わかりやすい文章だが、翻訳しにくい。このなかの人称代名詞を全部中国語の「我」と訳したら、何を言っている文章なのか、さっぱりわからない。人称代名詞そのものの使用ルールもあるが、文章に隠れているジェンダーについての理解がないと、文章全体に対する把握はできないだろう。

このように翻訳はときどき篩いに例えられている。篩いにかけて篩ってみたら言語そのものが漏れてきたのだが、残ったのは文化である。言い換えれば言葉はなんとか翻訳してしまうが、文化は翻訳できない説もある。これはその例の一つだと思う。

筆者は「雪国」における人称代名詞の使用状況の日中対照をしたところ、小説の会話部分では日本語原文は中国語訳文の3.47倍、叙述部分では5.75倍、平均は4.24倍という結果である。

日本人はあまり人称代名詞を使うのを好まない理由としては、人の前でできるだけ自己主張を控え、謙遜な態度で接したり、お互いに日本人であるという意識を強く持っていたりするからではないかと考えられる。

2007年7月の参議院選挙で各候補者の宣伝の車が都内を回っているのを見ていた。そのスピーカーから流れてきた宣伝文句は、「日本共産党の〇〇〇〇です。よろしくお願ひします。」「国民新党の〇〇〇〇です。国民新党の〇〇〇〇です。」などと、ほとんど「わたしが」聞こえなかった。日本語母語話者にはごく普通の言葉遣いに聞こえるが、日本語学習者の耳にはどうも主語不在の不思議が感じられる。選挙の言

葉の表現のなかにも「言語文化学」が隠れているのである。

3. 非断定的表現

日本語母語話者は非断定的表現を愛用している。その証拠のひとつは、「～だろう（でしょう、であろう）」、「～かもしれない（かもわからない）」、「～ようだ」、「～らしい」、「～ように思う（感じる、思われる、見える）」、「～と思われる」、「～と考えられる（と感じられる、と認められる）」、などのような非断定的表現の種類がものすごく多いからである。

非断定表現の機能はいろいろとあるが、「話し手の判断をややぼかして表す」、「自分の主張を婉曲的に述べたり遠まわしに言ったりする」、「自分の主張を独断ではなく客観的に述べたり、主張を和らげたりする」などの機能は、いかにも日本語母語話者らしい話し方であるように思われる。

日常生活だけでなく、日本の学者の学術論文に、「～であろう」、「～と言ってよいのではないか」、「～と見てもよい」などの表現が多く用いられている。外国の学者には理解しにくいもので、ときどき翻訳しにくい場合もある。われわれの目にはあまり自信のないような表現だと見えるが、作者の日本語母語話者の立場としては、これは聞き手や読み手に対する配慮が入っていると考えられる。また、聞き手や読み手に自分の主張を強制的にうけいれてもらおうとせず、あるいは個人の立場や主観性を弱めて客観性を強め、聞き手や読み手を尊重する表現だという。

学術論文の非断定表現を検証するために大学院生のひとりに学術雑誌を調べさせてみた。

中国語の論文は『教育研究』2004年第1号から第5号の論文5本と『外語教学と研究』2003年第1号～第5号から各分野の論文5本を資料とした。論文数量を一致させるために、日本語の論文は『日本語教育』2003年116号～119号各号の研究論文5本と、『教育学研究』2003年第1号～第4号から選んだ論文5本を資料とした。

これらの中の非断定表現を選び出し、その使用量を統計、分析したところ、つぎのような結果が明らかになった。

日本語の論文では「だろう」、「であろう」、「思われる」、「考えられる」、「ではないか」、「らしい」、「かろう」、「ようだ」、「たろう」、「ではないだろうか」、「でしょう」、「よう」、「ではなかろうか」、「かもしれない」、「といえる」などの表現は201カ所もあるのに対して、中国語の論文では、「恐怕是」、「可以认为」、「似乎」、「可以说」、「可能」、「也许」などのような類似している表現はわずか16カ所しかない。中国語母語話者の日本語学習者が日本語の非断定的表現に対する敏感さはこのデータからでもその一端が伺われるであろう。

日本語の非断定的表現に対応するものがないわけではないが、日本語のように頻繁に使うと中国語らしくない。はっきりと主張を表すときには確かな判断をするのが普通である。

4. 断り表現に見る「和」の精神

日本人の礼儀正しいことはよく知られている。人間関係の「和」を重視するのは伝統文化の特徴の一つである。体系をなしている尊敬、謙讓表現、定型化した挨拶表現、婉曲話法や曖昧表現の発達などは日本文化の「和」の精神を示している。間接性をもつ断り表現はその「和」の一端を表している典型的な例である。

日本語の以心伝心というコミュニケーションの様式は、相手に考えてもらうことが多い。話にはときどき余裕を残しておいて聞き手は根掘り葉掘り問いただすこともない。コミュニケーションの双方はなるべく相手の意見を尊重し、直接の衝突をさけるように心がけている。他人からの誘い、頼みに対してできないので承諾できなくてもあまり「いいえ」を口に出さない。普通は間接的な断りの方法を使うことが多い。

断りの型は次の5つに分類できる。

(1) 迎合法

相手の意思に乗り、自分の立場も相手と同じ

ことを表明し、相手の誘いや招きや頼みなどを承知して受け入れようと思うが、「しかし（けれども）……」、その後は省略される。

A：今度の土曜日のパーティーには先生も出られるそうで、いっしょに行ったらどうですか。

B：何もなければわたしもそのパーティーに参加したいんですが…

(2) ためらい法

「ちょっと」などの表現で、困る、躊躇うという態度表明をし、引き受けられない気持ちを伝えて相手に理解してもらう。

A：田中さん、そのへんでお茶でも飲んで行かない。

B：ちょっと今日は…

(3) 延期法

すぐには引き受けず、考えさせてもらう、あるいは待ってもらう。日本語の「考えておく」は普通断りを意味することが多いといわれる。

A：まあ、こういうことなんだけど

B：はあ、…あ、う、2、3日考えて…

(4) 口実法

口実や理由を作って断る。うそをいうように思われるが、相手に悪いことをするわけではない。でも目上の人への使用は避けたほうが良いという。

A：今度の日曜、みんなでテニスするんだけど、一緒にどう？

B：ああ、わたし、今度の日曜日は約束があるもんですから。

A：あ、そうなの。

B：ええ、すみません。

A：残念だなあ。

(5) 沈黙法

婉曲や間接の断りを使っても、相手に問いただされた場合の沈黙は、声のない断りを意味している場合が多いようである。交渉の中の沈黙はときどきこのような役を果たしている。中国語母語話者は日本語母語話者の相手が黙っていることをためらいだと思って、まだ可能性がある、期待しているが、その期待は外れることが多い。

日本語の間接的な断りでもときどき関係修復の言語行動を伴っている。

- 申し訳ありませんが、この次にはなんとか致します。
- お気持ちはありがたいのですが、又の機会にさせていただきます。
- 今度は遠慮させていただきます。この次にはお願いします。

(6) 曖昧な「いいです」と「結構です」

「いいです」「結構です」は肯定の答えにも否定の断りにも用いられるが、言葉の中の矛盾体で日本語の曖昧表現を端的に示しているのではないかと思う。中国の日本語教材における「いいです」の使用例はほとんど肯定の用法で、断りに用いられる用例はまれにしかない。中国語母語話者の教材制作者がおろそかにしたか、あるいは、中国語の干渉によるせい、いずれかの原因があるが、ちゃんとした文化シラバスがあれば、ある程度このようなことは避けられると思う。

間接的な断りの表現を愛用しているのは歴史的に「和」を重視している伝統から来たのではないだろうか。「和を以って貴しと為す」という十七条憲法の第一条はまだ現代社会の日本に影響を与えているとわたしは思っている。

でも、このような間接的な断り表現は中国語母語話者の日本語学習者にはなかなかなじめない。かれらはむしろ直接的な話し方を好んでいる。「不」、「不行」、「不想」、「不去」、「不愿意」などの表現をはっきりと言っている。

A：我来帮你拿吧。

B：不用了，我拿得了。

中国語母語話者にとってはこのような表現は相手の機嫌を損なうかもしれないという気持は毛頭ない。しかし、日本語母語話者にとっては、せっかくの好意を抱えて助けてあげようと思っているのに、冷たく断られてしまって感謝、感激の気持ちはまったくないと、受け止められている可能性が大きいだろう。

直接的な断りは簡単で、理解しやすい、虚偽や遠慮などなく、思想の交流も明快である。これに対して、間接的な断りは、言葉遣いは丁寧で、独断ではなく、相手に刺激を与えない。「以心伝心」の交流を重んじている。

2種類の断りの方法は、どちらがいいかということを決めることはできない。それぞれの文化のなかで広く応用されることは各自の文化に適応しているのを物語っていると思う。問題は日中コミュニケーションを行うときに、どちらの言語行動ルールにしたがって行動するかということである。日本語教育はもちろん、日本語のルールをちゃんと教えなければならないが、でもいかにいい学習者であってもいかに正確な日本語を使っている、母語話者でないかぎり、自分自身の文化から離れて母語話者とまったく同じように日本語あるいはほかの言語を操ることができない。外国語の運用はよく文化アイデンティティの意識を伴う。語用のミスはときどきこの文化アイデンティティの転換を無視したり怠ったりしてしまうときに起こることが多い。

5. 文法に見る文化的特徴

文法とは、いろいろな定義があるが、「その言語体系において、語句と語句とがつながって文を作る時の法則。」(新明解国語辞典)という定義が一般的である。

- 電車が走っている。

という文は名詞「電車」と動詞「走る」および助詞「が」と「て」、補助動詞「いる」からなっている。「電車が」は主語で、「走っている」は述語である。「ている」はアスペクトとテンスの役を果たしている。

すべての言語はこのように文法的な分析ができるわけである。しかし、ひとつの言語の文法構造は、その言語で表している思想や感情の表出を担っている。したがって、文法構造は表面的に無味乾燥なものであるように見えるが、その言葉を操る民族の魂がそのなかに宿っているものが結構多い。

(1) 授受表現

「～てくれる」、「～てくださる」、「～てやる」、「～てあげる」、「～てさしあげる」、「～てもらう」、「～ていただく」という授受表現は、日本語文法教育の重要な項目のひとつである。習得しにくい文法項目でもある。授受関係の複雑さと中国語の対応表現が少ないことに起因する。

習得しにくいのは文法構造、あるいは構文知識などのほかに、人間関係を考えたコミュニケーション上の問題もある。

授受表現を一番身に付けにくい原因は、利益、恩恵、人間関係、ウチとソトなどの要素に複雑にからんでいるところにある。

中国語の発想では「老师教我们日语」という文は、

○先生は私たちに日本語を教えます(?)。
(教えてください)

というふうに対応させればいいと思われがちである。

○ホームステイのお母さんは、いつもわたしのためにおいしい料理を作ります(?)
(作ってくれます)。

「～てくれる」、「～てくださる」は日本語初心者の目には余計な成分だと思われるから

である。

繰り返してドリル練習させてはじめて「先生はわたしたちに日本語を教えてください」の「てくださる」の使い方が定着してしまうが、どうしてこのように使わなければならない理由はなかなか納得できないのが普通である。

また「～てあげる」も同様であるが、文法説明としては、

「動詞の連用形に接続助詞「て」の付いた形に付き、主語で表されるサービスの送り手が、他人のためにすることを、送り手の側から表す。[「…てやる」と異なり、受け手に対する軽い敬意がこめられている。目上に対しては「さしあげる」を用いるのが一般的]」(大辞林)

「動作主の行為が相手の人に恩恵を与える意を表す。」という補足説明もある。しかし、「恩恵を与える」という行動はある文化ではよいこととしてうけとめるかもしれないが、日本文化ではあまり親しい間柄でなければ受け入れにくいという。他人からの恩恵を受けることはときどき一種の精神的な負担となることがあるようである。したがって、この意味では恩恵を与えることは難しい。その難しさは恩恵の与え手にもあるし、受ける側にもある。むしろ受ける側のほうがより難しいかもしれない。

「恩を売る」、「恩を着せる」という言い方があるのはその裏に隠れている意味が伺われるだろう。

○先生、お荷物を持ってあげましょうか。

という言い方はあまり丁寧でないと言ったら、今度は

○先生、お荷物を持って差し上げましょう。

と、教師のコメントを聞いて丁寧の程度を上げるように修正した。

○先生、お荷物をお持ちしましょう。

という言い方を習得できるのには、文法構文以外の知識、つまり利益、恩恵意識をよく理解してからでないと無理なのだろう。

同じことで、次の文に対する正確な理解もこのような知識はかせない。

○「してあげる」という気持ちでほんとうの国際協力はできません。

(2) 受身

受身の基本文型は

- 田中君はよく先生に褒められる。
- ワインはぶどうから作られる。
- このビルは有名な建築家によって建てられた。

文型があれば、その文型によって練習すればいい。ただし、「に」「から」「によって」の使い分けを知ってもらえばいい。学習者にとってはそれほど難しいことではない。

しかし、

- 隣の赤ちゃんに泣かれて一晩中眠れなかった。
- 猫の手も借りたいほど忙しいときに君に行かれたら、こっちはどうなるんだ。

というような自動詞の受身の使い方にはちょっと難しく感じられ、その習得もうまくいかない。

つまり、自動詞の迷惑の受身は学習者にとってはむずかしいのである。

自動詞だけではなく、他動詞の場合も迷惑の受身がある。

- 花壇の中にごみを捨てられて困った。
- そんなところに荷物を置かれては困る。

主語「わたし」は省略されている。話し手が自分の苦しみを述べているから、とくに必要がなければ、言わないのである。

このような文型について被害意識が強い民族だと言われているが、わたしの考えとしては、

被害というよりも、迷惑意識の強い人間の姿だと感じられる。日本人は小さいときから他人に迷惑をかけることがよくないことだという教育を受けている。もちろんいいことだと思うが、しかし、その反面、他人から迷惑をかけられるのもいやがっているのだ。ここでは中国人の価値と少し異なるかもしれない。中国の場合は「お互いに助け合う・相互援助する」「人に助力することをたのしみとする」という意識が小さいときからよく教えられている。その深層の原因はどこにあるか、詳しい研究は別の機会に譲るが、この二つの対照について国内のシンポジウムの休みの時間に数人の参加者に言って聞かせてみたら、日本人はできるだけ他人に迷惑をかけないようにするが、中国人はできるだけお互いに迷惑をかけるようにする、と冗談めいて返してくれる先生がいた。視点が違うからかもしれない。

(3) 接続助詞「から」と「ので」

いずれも原因や理由を表すが、文法教育の場合は、「から」は活用語の終止形の後に、「ので」は活用語の連体形の後について用いられる、という接続の方法などを教える。しかし、この2つの接続助詞は接続の方法や文法の制限だけのことではない。

「ので」は現実にある、あるいは、あった行動や状況の原因・理由を示す。これに対して、「から」は話し手の意思・考えなどの原因・理由を示す。

文法的説明としては、「から」で接続した文の後ろには命令、希望、推量、勧誘、禁止、質問など、話し手の主観にもとづくような場合に用いられるが、「ので」は「から」に比べ条件としての独立性が弱い場合に用いられることが多い。

しかし、依頼や禁止の内容を伝える場合、「から」を使うと、話し手の考えや意志が強く出すぎ、聞く人に反感を持たれる恐れがあるから、「ので」を用いて理由を和らげるという使い方がよく見られる。

- 7時から9時までは禁煙ですので、ご協力ください。
- 頭がすこし痛いので、早く帰ってもよろしいでしょうか。

このように話し手は聞き手の感じ方をよく察知しないと正しい文法表現であってもスムーズにコミュニケーションをすることが期待できないであろう。

(4) 接続助詞「けど」と「が」

二つとも受け入れの態度の表明、いいよどみと前置きを表すことができる。

- 山田さん、いらっしゃいますか。
はい、おりますけど。
- あのう、実はあしたの会議に出られないんですが。
- 陳と申しますが、山田さんはいらっしゃいますか。

受け入れの態度の表明やいいよどみでも、前置きでも、中国語母語話者にとっては、一種の含蓄の表現であるように思われる。話しを全部打ち明けるのではなく、なにか余裕を残しておいて相手とのコミュニケーションがやりやすくなるようにする言語行動ではないかと思っている。奥深い味わいのある言語表現だと感じられる。

これも中国語母語話者の学習者の習得しにくい点の一つだと思う。

(5) 副助詞「～ぐらい」、「～ほど」、「～ばかり」、「～でも」

これらはいずれも大体の数、概数としてよく用いられる。

- 千円ばかり貸していただけませんか。
- 三日ほど拝借します。
- あと三日ぐらい待ってくれませんか。

また、「でも」は物事を限定せず、軽く大体を指すのに用いられる。

- ちょっと軽くお食事でもいかがですか。

これらの表現は対人コミュニケーションをするときには話し相手に余裕を持たせ、聞き手には柔らかい感じを与えてくれる働きがあるから日本語母語話者には愛用されている。

中国語母語話者にはほかしとか曖昧とかいうような感じがあるかもしれないが、このような言い回しは表現心理の特徴ではないかと思う。

(6) 願望疑問文「～たいですか」と「～ほしいですか」

- コーヒーが(を) 飲みたいです。
- 新しい洋服がほしいです。

このような希望、願望表現はそれほど複雑なものではない。しかし、そのあとに「か」をつけて疑問文にしたら、事情が変わってくる。つまり、願望疑問文は聞き手の私的領域に関わるため、日本語ではふつう敬語を使う必要のある相手に対しての使用は失礼なことになる。丁寧さを保つために、願望疑問文を回避し、いろいろな代用表現の使用が可能であるという指摘があった。

中国の日本語教材はこの面においてかなり改善する余地があるのではないと思う。

次は中国で広く用いられている日本語教材のなかの会話である。

- 李 牧野さん、あなたは何か欲しい物がありますか。
- 牧野 はい、あります。
- 李 何が欲しいのですか。
- 牧野 慣用句の辞典が欲しいのです。…
- 李 牧野さんは何か買いたい物がありますか。
- 牧野 はい、あります。

李 何が買いたいですか。
 牧野 ラジカセが買いたいですか。
 李 ステレオは買いたくないんですか。
 牧野 はい、ステレオは欲しくありません。
 李 ラジカセを買って何を聞きたいのですか。

○ コーヒーを入れましたよ。(ちょっと他人への布施の感じがある)
 ○ ラジオが壊れました。(話者には関係ない)
 ○ ラジオを壊しました。(話者には責任があるという姿勢が感じられる。)

このように願望疑問文は場や相手をよそにしてむやみに使うと、尋問やインタビューのような感じがして、親しい間柄でない、結局相手に不快感を与えてしまう。

(7) 自動詞と他動詞

日本語の中には、対になる自動詞と他動詞がたくさんあることがよく知られている。例えば、

育つ—育てる 集まる—集める
 並ぶ—並べる 動く—動かす

使い方としては、「が」か「を」かどちらかを伴っているという文法説明が普通である。

○ ドアがあく。 ○ ドアをあける。
 ○ 火が消える。 ○ 火を消す。

文法上からみれば次のような使い方は学習者にとっては難しいように思われる。

○ 写真を写したけれども、写らなかった。
 ○ 大学を受けたけれども、受からなかった。

これらの文法上の使いわけは繰り返してトレーニングをすれば、ある程度母語の干渉を乗り越えて習得していくと予想されている。

ところが、自他動詞の使い分けにより、裏に隠れている意味理解も違うわけである。これは学習者にとってはもっとも難しいところだと思われる。文法の問題を超えたからである。

お客さんのために：

○ コーヒーが入りましたよ。(謙虚で低い姿勢が感じられる)

2007年5月、北海道のある食品加工卸会社は、主に豚肉を使ったひき肉を「牛ミンチ」として出荷していた事件があった。社長の記者会見のテレビ放送を見ていた。そのときの記者の詰問は深く印象に残っている。

○ 混ざったですか、混ぜたですか。

という詰問でした。その社長は記者の詰問に対して、頭を下げたままで何も言えなかった。

自動詞と他動詞の使い方として日本語教育ではあつかってはいるが、自動詞は「その動作が直接に影響を及ぼす対象を持たない動詞」、他動詞は「その動作が動作主〔＝文法上は一般に主語〕以外のものを対象として行われ、それに何らかの影響や変化を及ぼす動詞」。(新明解国語辞典) これはせいぜい文法的な説明である。上の例でもわかるように、実社会の言語生活ではこれより豊富に使用されているのであろう。

事件の背景があつてこの「混ざる」は自動詞で、「知らないうちに」、「自然に」、あるいは「おのずと」混入してしまうという意味がある。これに対し「混ぜる」は他動詞で「故意に」、「意識的に」入れてしまうという意味がある。「混ざった」と言ったら、一種の責任逃れのよな感じをあたえてくれる。

したがって、自動詞と他動詞の中に含まれる「責任逃れ」、「責任を負う」という用い方は無視できない表現の特徴であろう。

6. 駅や街頭の掲示に見る日本語

駅のホームでは

○ お年寄りや、からだの不自由な方に席を譲りましょう。

○この付近はたいへん込み合いますので、ご乗車になれない場合があります。ホーム中程が比較的空いておりますので、そちらもご利用ください。お客様のご協力をお願いいたします。

駅のエレベーターでは

○このエレベーターは、どなたでもご利用になれます。身体に障害のある方、ご高齢の方などがご利用の際には、お譲りいただきますよう、ご協力をお願いいたします。

駅の売店では

○いつもキヨスクをご利用いただきまして、まことにありがとうございます。当売店は、しばらくの間、閉店させていただきます。

なお、閉店後のお買い物は最寄のキヨスクかニューデイズをご利用いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

最寄のキヨスク：改札外コンコースにございます。

最寄のニューデイズ：改札外コンコースにございます。

バスの中では

○やむをえず急ブレーキをかける場合もあります。手すりや吊皮などにおつかまりください。

駅や街角などでよくこのような掲示を見かける。これはこの国に来た人の目にはどのように映っているのだろうか。これらの掲示の意味は次のように受け止められると思う。

(1)親切に情報を提供してくれる。

(2)言葉遣いは非常に丁寧で、人の心を暖める感じである。

(3)社会の礼儀作法を示し、人々の言語行動や非言語行動によい影響を与える。

駅や街頭の掲示の多くは注意や忠告で、言葉の表現も命令や禁止などが多いのである。

命令表現や禁止表現といったら、中国の日本語教育では、よく次のような文型で導入する機会が多い。

○～てください ○～てはいけません
○～ないでください ○～するな

たとえば許容と禁止の表現はよくつぎのような練習が教材のなかに組み込まれている。

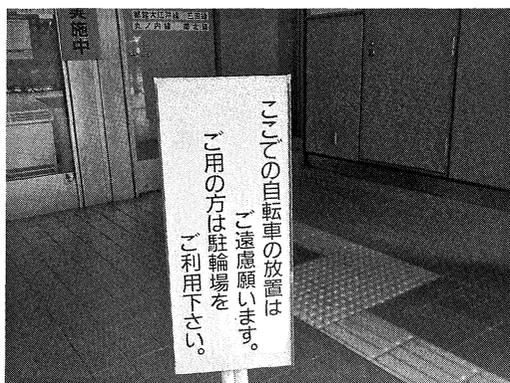
○ここで遊んでもいいですか。
いいえ、ここで遊んではいけません。
○教室でタバコを吸ってもいいですか。
いいえ、教室でたばこを吸ってはいけません。
○病院で携帯電話を使ってもいいですか。
いいえ、病院で携帯電話を使ってはいけません。

このような機械的なドリル練習はだんだん固定化してしまっていて、禁止表現を覚えていくわけである。

しかし、日本語の表現はいろいろで、同じ機能は違う表現で実現することができ、場面やコミュニケーションの相手により選択するわけである。「～てください」、「～てはいけません」、「～ないでください」、「～するな」のほかに次のような表現をよく見かける。

○ご遠慮ください ○ご遠慮願います
○お断りします ○禁止いたします
○禁止します ○禁じます
○禁止 ○禁ずる

このなかでは、とくに「ご遠慮ください」、「ご遠慮願います」、「禁止いたします」、「お断



街角の掲示にみる禁止表現と命令表現

ります」, 「～ないでください」, 「お～ください」などの表現がよく目立っている。

一部の掲示は直接の命令や禁止表現を回避し、客観的な叙述を用いて読み手に推測させ、考えさせる。これは上級な命令、禁止表現ではないだろうかと思う。

- 路上禁煙地区です。指定区域内では罰則が適用されます。
- 当駅は喫煙所以外は終日禁煙となっております。おたばこは乗り換え階段付近の喫煙所をご利用ください。

2つの掲示はいずれも「～てはいけません」というような直接的な表現を避けているが、でも事実上禁止の情報がちゃんと含まれている。このような表現は人を人間扱いしているような感じで、上品な表現だと思う。

また、命令や禁止の用法の代わりに、否定の使い方ではなく、肯定的で、そして、「～ましょう」という勧誘表現で人々の行動を正しいマナーのほうへ導いている。これも親切で、平等な立場にたって読み手や聞き手に忠告を与える言語の技法だと思う。

- 犬を連れて入園するのはやめましょう。
- 自分で出したゴミはなるべく持ち帰りましょう。

以上見てきたようにこれらの掲示の多くは、言葉遣いの丁寧度はかなり高く、読み手には親切な感じを与えてくれる。

言語はいろいろな働きがあるが、そのなかの一つは、よい人間関係を作ることである。丁寧な言葉遣いはときどき人の心に潤いを与えて暖めてくれる働きがある。その反面、言語は人間関係を破壊する働きもある。乱暴な話し方は関係を悪くしてしまっ、コミュニケーションもうまくいかないのである。駅や街頭の丁寧な日本語は人々の言葉遣いによる影響を与えてくれるだろう。つまりモデル的、教育的な働きがあると思う。

III 終わりに

日本語と日本文化との接点の考察を通して、その特徴がいくつか明らかになってきた。まず「和」の精神を重視することである。これは昔の聖徳太子の「十七条憲法」はいまでも強く日本社会に影響を与えている証だと考えられる。次に、「和」の精神は言語コミュニケーションの中にいろいろな形で現れているが、とくに遠慮表現というのが目立っている。遠慮表現こそ日本語母語話者の言語表現や対人コミュニケーションの中核をなしていると言ってもいいぐらいである。これについての理解を通して、日本人理解、ひいては日本社会理解につながるであろう。最後には人間関係の「和」を重視する言語行動は美しい日本語の代表的なもので、伝統文化はいろいろな内容があるが、言語行動様式や言語コミュニケーションはその中の重要な一つである。したがって、「和」の社会を維持していくためにはこのような伝統をよく守っていくのはどうしても必要不可欠なことであり、そして日本語教育はこのような美しい日本語の導入に力を入れるのも当然なことであろう。

*本稿は、2007年8月7日に東洋大学アジア文化研究所研究例会で報告した原稿に加筆訂正したものである。